グスタフ・クリムト《水蛇Ⅱ》――動植物モチーフから読み解く制作背景

山田耀（京都大学）

本発表では、世紀末ウィーンの画家グスタフ・クリムト（1862-1918）による《水蛇Ⅱ》（1904-07、個人蔵）を取り上げ、動植物モチーフの分析を通じて、本作の制作背景を明らかにし、クリムトの画業における重要性を示すことを目指す。

本作は1904年の「第20回ウィーン分離派展」に未完成の状態ながら出品されたのち、1906-07年に大幅に加筆修正され、1908 年にクリムトの主催する展覧会「クンストシャウ」にて再び公開された。世紀末に流行したファム・ファタールを題材とする作品であり、横長の画面には水中世界に横たわる4人の裸婦たちが等身大で描かれている。彼女たちは大量の植物で飾られ、その背景には蛇とも蛸とも見える朱色の生物や、熱帯魚の群れが泳いでいる。クリムトは20世紀初頭に黄金様式と呼ばれる独自の絵画様式を確立したが、本作に見られる艶かしい人物像と黄金を用いた平面的な装飾の融合はまさにその一例である。また、本作は1889年頃からクリムトが盛んに制作した水の中の女性を主題とする作品群の集大成とも言える。しかし、本作は1964年の展覧会を最後に長らく所在不明となり、再び公の場に展示されたのは 2022-23 年にベルヴェデーレ美術館等で開催された「クリムト」展でのことである。そのため、本作は長らく精度に劣る複製図版のみをもとに研究されており、先行研究において細かな動植物モチーフの意義は見落とされてきた。

本発表では、2022-23年の展覧会を契機に公開された高精度図版や、近年クリムト財団が収集・公開している新出関連資料などに基づいて、《水蛇Ⅱ》に描かれた動植物モチーフを①蛇、②熱帯魚、③花に大別して分析し、そのイメージの源泉について検討する。そこから、①蛇のイメージには同時代の海洋冒険譚であるジュール・ヴェルヌ著『海底二万里』からの影響があること、②熱帯魚の図像は南洋の生物に関する博物学研究の成果物が図像源泉となっていること、③花のモチーフは1905年頃からの花畑を主題とする風景画の制作が霊感となっていることを指摘し、当時のクリムトには自然に対する多様な関心があったことを示す。

さらに、動植物モチーフの分析結果から《水蛇Ⅱ》の作品解釈にも迫る。というのも、本作は先行研究において《水蛇Ⅰ》（1904-07、ベルヴェデーレ美術館）との関連性が強調されてきたが、本作を詳細に分析すると《金魚》（1901-02、ゾロトゥルン美術館）との強い連続性が浮かび上がってくる。そこから、言葉ではなく絵画を通して思いを語ることを好んだクリムトにとって、《金魚》の発表が彼を批判する人々へのいわば宣戦布告であったと解釈する先行研究を踏まえ、《水蛇Ⅱ》にも自身の芸術観を世に問うマニフェスト的側面を見出す。そして、本作の制作時にクリムトが画業の中でも特に波乱に満ちた状況に置かれていたことを鑑みて、そのマニフェストの重要性を示すことを試みる。